

北の柄杓・海洋編

第一章 交易船 (2006/10/16)

そのとき、相馬藩出身の蘭学者・藤村玄庵は、見知らぬ怪しげな大船の甲板で、澄み切った夜空を眺めていた。北の方角に見える柄杓星が徐々に小さくなっていく。

あの日も途中まではよく晴れて、海も凪いでいたのだが……。江戸表へと急いだ、あの日のことだ。藩主逝去の知らせと、取り急ぎ江戸藩邸へ帰るようにと兄からの便りが届いた。長崎から江戸までは遠い。しかし船便で行けば程なく着けることであろう……。今から思えば、そう考えたのがいけなかった。

港から船を幾度か乗り換え、土佐沖まで行ったときだった。船が突如強い風にあおられて大きく傾き、ぼんやりと甲板から海を眺めていた玄庵だけが海に投げ出された。それより先の記憶はない。おそらく海面に落ちたときの衝撃で気を失ったのであろう。運悪くそのとき誰も彼の災難を目撃しておらず、船はそのまま遠ざかっていったものと思われる。

気がつけば彼は見なれぬ人相やいでたちをした男達に取り囲まれていて、彼らは口々に何か異国の言葉を話している。はてさてどうしたものかと途方に暮れていると、なかにひとりだけオランダ語で話しかけてきた者がある。

彼は、彼らから見ても得体の知れぬ異国人である玄庵に対し、ためしにオランダ語で話しかけてきたものと見える。玄庵のほうにしても、これぞ天の助けと必死で会話をしようと試み、まず自分は日本人で旅の途中である、と尝试してみた。すると相手方も言葉が通じることに安堵した様子で色々と説明し始めたではないか。

やがて、船長らしき人物のところへ連れて行かれ、先ほどのオランダ語を話す男―後から彼の名前はハサンということがわかったのだが―を仲立ちにして話を聞くことができた。それによれば、彼らはアラビアという地方から来た自由貿易商人たちで、たまたま黒潮に紛れて日本近海まで迷い込んで来たとき海に漂う玄庵に気づいて拾い上げたらしい。

普通ならば国に帰すところなれど……。と船長は言った。

「なんでもお前の国では他国との出入はまかりならぬとのお達しがあるそうではないか。それでは帰っても無事には済まぬであろうから、このまま自分等の根城へ連れて行ってやらぬでもない。丁度わが祖国の王から、東方の事情に通じた者が欲しいとのご命令があったところだ。あとは、神の思し召しと、お前の意思次第だが。」

それもそうよのと玄庵も同意した。こうなってしまった上は無理を押しつけて帰れば一族郎党を渡航の国禁に巻き込むことにもなる。いっそ海上にて行き方知れずになったということに落ち着けば、そのほうが無難であろう。それに、人の生涯とはそもそも一夜の夢の如し、どこへなと行くも一興。

それにしても、回教徒とはかくも大変なものか。なんと彼らは日に五回も一定の方角へ向かって額づき、酒も口にせず、貧しきものには施しをし、さらに年にひと月は日中は食

べ物や飲み物を口に入れず、戦も商いも休むのだという。それも「神」というもののために、である。もしやと思い、切支丹と同じかと問えばハサンはその通りだと答えた。

「ただ、切支丹たちは、いつの頃からか使徒や使徒の母の偶像を作り、それを崇拜するようになってしまった。さらには我が民族の使徒ムハンマドを使徒だとは認めない。それだけといえばそれだけだが、悪いことに、それらがもっとも神の教えに反することなのだ。使徒とは、あくまでも人間であって、真の神はもっともっと高みにおわす存在である、と言え、お前にも判ってもらえようか。」

と、彼は力説した。

「俺たちが礼拝しているのは、メッカという街にあるカーパ神殿にある、黒い石。それはもともとは白かったが、人間の罪のために真っ黒くなってしまったと言われている。それをもって礼拝の対象とするのがイスラムである、」

第二章 結果の種 2006/10/23

航海のあいだに、玄庵はハサンから様々なことを教えて貰った。

まず、他の乗組員との意思伝達のために、アラビアの言葉を教えてもらうのだが、これがまた難儀この上ない。ものの名前ひとつにしても、「何々が」と「何々を」とで語尾が違う。「どうする」にしても、それを「誰が」行うかによって変わる。どうやらこの言葉においては、子音が意味を、母音が役割を担っているらしい・・・と理解するまでに、かなりの時間を要した。

次にハサンは航海地図を見せてくれた。当時の日本では海外の地図を見ることなどは当然ご法度であったから、玄庵は目を皿のようにして眺めた。一方ハサンのほうは、ごくありふれた地図を必死で覗き込む玄庵の様子の方が、よほど物珍しく可笑しく、さりとて好意的に受け取ってくれたのであろう、自分の仕事の合間を見てはよく説明してくれた。

「今がここだ。もうすぐムガールの港に着く。ここで東から持ってきた荷の半分を降ろすのだ。」

彼が指差したのは、今で言うインドの西の地方である。当時かの地はイスラム王朝だった。

「清の国の西か。してみれば、かの地は天竺ではないか。」

「はて、テンジクとはついぞ聞いた事のない名だが。とにかく我らには昔のことはよう分からぬ。今はイスラム支配下にある、それだけを知っておれば商いができるのでな。」

たしかに諸行無常とあるが、仏法発祥の地といえども、その定めを逃れることはできぬのか。人の世はやはり一時の夢よ・・・と、玄庵は思った。

「時に、お前は何を信仰しているのか。」ハサンが尋ねた。

「わしか。わしは浄土宗じゃ。お前達から見れば、仏教のひとつということになるかの。」

「仏教？あまり聞かぬ名じゃのう。」

玄庵は、ここはできるだけ正確に説明しなければならぬと思った。だが僧侶でもない自

分にやり遂せるだろうか。

まず、始祖は天竺の人で、釈迦という。彼は或る時、悟りを開いて仏陀となった。仏陀とは完全なる真理に目覚めた人を指し、彼によって説かれた教えが仏教である。して、その悟りの内容とは、人の本来あるべき姿を見出すためのもので、あらゆる欲を捨て、いかなるものにもとらわれず、物事をありのままに観れば、生死をも越える幸福なる境地を見出すことが可能であると説く。ただ、それは体から湧き出でる生命維持のための営みを超越することをも含み、それを克服できぬ限り、生まれ変わりを際限なく繰り返すこととなる。現に、この世に姿かたちを変えぬものは凡そないであろう。時の流れもまた苦しみの元となるのだ。故にその成就是かなり困難を伴うものであって、信徒達は完全なる悟りに導いてくれる多くの先達の慈悲を信じて、来世には浄土に生まれさせてもらえるよう願って帰依する。一心に祈る心は自ずと澄み、良き結果の種となるからである。

また、人は得てして自分というものがあたかも単独で存在しているものと思いがちであるが、人や獣の生き死にはもとより、潮の満ち引き、空の星々の輝きに至るまで、すべての事柄は、何らかの作用の結果として生じたものである。たとえば、今自分がここにいることも、仏法から言うなれば因縁が作用したと考えられる。海があり、そこに海流があり、学者である自分が船に乗るべき用事ができ、また海に投げ出され、そこへお前達が通りかかり、自分を見つけてくれ、なおかつ助けあげようと思ってくれたが故に、今わしはここにいる。これらの要素がどれ一つ欠けても、今は無かったであろう。そのように、物事は全て何らかの形で結びついており、それぞれに存在理由をもって起きるべくして起きるのであり、また将来起こる事柄の種となるのだ。もっとも、その種が良いものか悪いものかは、人の智慧のととも及ぶところではないし、ましてや人如きが判断しようなどと考えること自体が甚だおこがましいことであるのだが。

あるいは、その完全なる真理そのものか、それを司る存在が、お前達の言うところの「神」なのかも知れぬな・・・彼は最後にそう付け加えた。

ハサンは黙って聞いていた。

第三章 異国の星空 2006/10/31

数日後、船を降りた時の玄庵の姿は、他の乗組員達と殆ど見分けがつかぬほどになっていた。本人としては、無論おのが風体を変えようなどとは露ほども思っていなかったのであるが、結局そうってしまった、というのが正確なところである。

そもそも、助け上げられた際に草履がすでになくなっていて、足袋は身についたままであったが乗組員から貰った履物は、足袋を履いたままでは入らぬゆえ、まず足元が変わった。そのうちに髷が伸びきって何ともいかなくなると、ハサンが髪を整えてやろうというので任せたはいいが、やはり彼らと同じ髪型にされてしまった。さらには、ターバンとやら呼ぶ長い一枚布で頭をぐるぐる巻いて、口ひげを伸ばしていなければ、一人前の男として見ては貰えぬというのでその通りにせざるを得なかったのである。髷を失くされてしまったのだから、せめて一人前として扱ってもらえるようにしないことには武士として最後

の意地が立たぬ。学者とはいえ、やはり彼は藩士として育った者の一人であった。

それでも、武士として一応の面目を施したと思うのは、牛の如き馬－現代でいう駱駝のことである－にまたがった時だ。もちろん見るのも乗るのも初めてではあったが、馬は幼少の頃より乗り慣れておる。尻を叩くと未知なる生き物は馬と同じように歩き出した。

船長や乗組員達とは、どうやらここで別れねばならぬ様子。特にハサンは共に過ごす時間が長く、ことさらに別れを惜しんでくれた。男同士で抱き合うことなど、わが国ではおおよそ考えられなかったが、それも風習の一つらしいので仕方がない。

「お前には大層世話になった。礼を言う。」

玄庵が言うと、ハサンも手を握り返した。

「達者でな。くれぐれも王に対しては失礼なきよう。・・・そしてお前がもし入信したあかつきには、兄弟として会おうぞ。」

どうやらこの地では日本以上に義兄弟の契りを結ぶものらしい。

王宮は想像通りたいていそう豪華であった。いたるところに美しい陶器の装飾が施されており、多くの役人らしき人物が出入している。中でもひと際輝きを増す一室の片隅に座って待つように言われてその通りにしていると、果たして王が入ってきて、正面の椅子に腰掛けた。

「余が王である。東から来たというのはそなたか。」

「日本から参りました者で、藤村玄庵と申します。」

「変わった座り方をしておるの。」

玄庵は正座をして待っていたのである。

「この座り方のことでございますか。これは正座と申しまして、我が国では正式な座り方とされております。特に身分の高い方の前では、これでなければなりません。」

「左様か。では、そのまま話すことをさし許す。さて、そなたの今後だが何とするか・・・とりあえず、学問所預けとし、時折そなたの国の話をして欲しいのだが。」

「は。そもそもこの身は、貴国の船にて助けていただいたものにございますゆえ、いかようにも。」

それから暫くのあいだ彼は王や役人の前で日本のこと・・・日本における宗教、身分制のあることや庶民の暮らしぶり、東洋に伝わる儒教と仏教について話をする役目を負うた。－十八世紀前半の日本である－

「つまり神道とは、いずれにも魂が宿っているという我が国固有の精霊信仰と言えるものでございます。信仰の対象が山そのものであったり大河の源流であったりすることから考えると、自然全体に対する尊敬の念から出たものとするのが妥当なように思われます。またこれに対して、仏教と儒教とは、いわば人が人として真に幸せに生きていくには如何様に考えていけばよいのかを説くものでございます。故に神道とは異なる次元であったために神道と共存しているのでありましょう。」

「日本が他の国と交わりを持たなくなったのは、実は切支丹の問題があったからでございます。聞くとところによれば、切支丹たちはまず布教をして信徒を増やしてからその国に攻め込むとか。また、今は国を捨てざるを得なくなった身ゆえ言うことができるのでありま

すが、神以外は平等であるという教えは、幕府には都合の悪い話であったと思われまゝ。ただオランダだけが布教せぬという約束で出入を許され、学問する者の窓になり得た由。故に私もその一人となったのでございます。」

「すると、そなた自身は切支丹ではないのだな。」

「私は仏教徒でございます。蘭学を志したのは、ただ単に最先端の学問がしたかったからだけのこと。たまたま主の期待と理解を得ることができましたが。」

「ほほお、それは興味深い。余は、そのような学問一途な者や良き作物を生み出すものを好む。いつまででもいるがよいぞ。」

「有り難き幸せに存じます。」

「ところでじゃ・・・。」

ある夜、彼の話が一通り終わると王は近寄ってきて玄庵を見据えた。

「そなた、晴れてイスラム教徒になる気はないか。」

「は？」

玄庵は戸惑った。彼が仏教徒であることを百も承知のはずのこの王は何を言っているのであろうか。

「信仰はそなた次第だが、このままこの地で暮らすには不都合なことが多い。異教徒税も払わねばならぬし、嫁取りもできぬ。正直言うと、余はそなたが気に入った。ぜひとも永遠に留まってもらいたい。そこで我が末妹を添わせることとしたいのだ。」

まさに寝耳に水の話であった。国で言うならば藩士が主君の家族を嫁にするようなものではないか。

「そ、それはとんでもないことで。」

「いや、実はそなたの話聞いていたのは、余や役人たちだけではなかったのだ。珍しい話は誰しも聴きたがるもの。女達も皆そこの御簾の陰より見たり聴いたりしておった。特に末の妹が、とうとうそなたに惚れてしもうたらしい。ま、身分は当面学問所預かりのまままで我慢してもらおうとして、どうであろう。そなたが言うところの、精霊たる神々と、もとは人たる仏とやら、だが高みにおわす唯一の神、そのお方に仕えて生きるということではできぬか。」

思いもかけぬ申し出の後、彼は改めて周りにはいるイスラムの神学者たちに宗旨を詳しく尋ね、昼も夜も考え続けた。

たとえば彼自身が船中でハサンに話した通り、仏法の根源たる摂理を、イスラムの「神」と同一であると仮定する。人たる釈迦が悟りを得て仏陀となったその力は果たして何からもたらされたものであろうか。前世と現世と来世とを維持し続ける原動力とは・・・。何事にもそれを生じさせ、維持し、あるいは滅ぼすには何らかの作用がなければならぬ。－彼も一科学者であった－

その真理こそが彼らの言う「神」であり、仏法はその真理の作用によって生まれた「人間界での法」であると分けて考えるならば、その思想の共存は可能なのではあるまいか。

むしろ、仏法の中庸をもって考えれば考えるほど「神」の存在を否定する必要性がなくなるように彼には思えるのであった。国を超え、民族を超え、貧富の差を越え、一心同体

となって、ひとつのものに集約していく礼拝の姿は、仏法の目指す理想でもあるかも知れぬ・・・。

彼は結局、数ヵ月後に王族の末席に名を連ね、かの地で天文学の研究を続けて六十数年の生涯を閉じた。ただ彼は晩年、時折星空を見上げてはこう言っていたという。「どこの国にても、北の柄杓星は見えるものよの。」と・・・。

北の柄杓・森林編

第四章 郵便配達人 2006/11/10

「白い森」と呼ばれる森があった。もともとあまり人口の多くない寒い国のことで、しかも不便な森となれば、なおさら住む人は稀であったが、それでも郵便配達人は、その僅か数人の住人のために郵便物を運んでいく。

この地域の配達人は周りの人々からアリョーシャと呼ばれている。年の頃はまだ二十五、六というところか。食事を済ませると彼は愛妻の手弁当をリュックに入れ、水筒と大きな鈴を腰にぶら下げた。家を出て、町の局で郵便物を受け取ると、森に入っていく。こうして今日もまたいつもと変わらない一日が始まる。

森の入り口にあるポプラは、幹がかなり太い。三十分ほど歩くと、彼にとって最初の配達先が見えてくる。そこには傾斜をつけた赤い屋根の教会に、一組の老夫婦が住んでいるのだった。

「や、いらっしゃい。ご苦労様。」

老牧師が庭先の椅子から立ち上がった。

「こんちは。元気にしてるかね、牧師さん。」

「まあ、なんとかね。もっとも、わしらは皆、神からのお召しが来るまでは元気にしていません。」

「そらあ、そうだなあ。はいこれ。」

アリョーシャは牧師に手紙の束と一つの小包を手渡した。

「ふむ、これはマルジット宛てか・・・おい、マルジット！」

はいという返事が遠くで聞こえ、それから彼らは聞き馴染んだ足音が近寄ってくるのを待った。やがて姿を現した牧師夫人は、大きなポケットのついたエプロン姿で、手にはパンを入れた籠を持っている。

「おや、アリョーシャ来てたのかい。いらっしゃい。それにしても、またいつもと同じ朝なんだねえ。年をとると、日が動くのが速くなるよ。」

「これこれ、またいつもの愚痴をこぼしなさんな。すべては思し召しじゃ。」

牧師は窘めたが、そう言いつつも、それはたしかにそうだなと心の中では思っている。毎朝目覚め、少しの飲み物と食事で命を永らえ、正午と夕暮れに1回ずつ鐘を鳴らしに塔

を上る，そして週に一度，礼拝の務めのために近隣の人々を迎えて説教をしていると，何年もの月日がいつの間にか矢のような速さで過ぎているのだ。ある朝，ふと目覚めてみたら天国だった・・・ということも今ではじゅうぶんあり得る。

「ところで，それは何かね？」

「あらいやだ，このあいだ，あなたの新しい服を仕立てると言ったじゃありませんか。その生地ですよ。」

「あ，そうか。すっかり忘れていたわい。わしのか。」

「そうですよ。」

夫人はふふっと笑った。その笑顔がなんともいえず可愛い。

「それじゃ，また来るから。」

配達人は次の仕事に向かうために，教会の敷地を引き返して森の道へ出た。

「気をつけてな。」

背中越しに声がした。

第五章 数学者 2006/11/11

次の配達先は，エカテリナ・イワノヴナ・クニーグノヴァ博士宅だ。彼女は数学者である。アリョーシャは 赴任してきて最初にここに来たとき，彼女に尋ねた。

「数学の先生がなんだってこんな辺鄙な森にいるんだね？」

「自然にこそ数学の基礎があるものなのよ。」

彼女は微笑みながらこう答えた。

「へえ・・・。」

「たとえば蜂の巣にしてもね，何故六角形だと思う？」

「そんなこと言われたってなあ・・・。習性なんじゃないの？」

「じゃあ，どうしてそんな習性になったかって考えてみましょうか。ある一定の空間をできるだけ効率よく埋めるには，六角形が一番適していることが数学的には知られているの。三角形でも四角形でもできるけれど，六角形ほどの強度はないのよ。蜂たちはそれをちゃんと知ってて作ってる。凄いと思わない？」

「うーん・・・。」

「それと，木の葉も・・・。」

エカテリナ・イワノヴナは，銀杏と楓と朴の葉を部屋の中から持ってきた。どうして部屋の中に葉っぱが置いてあったのだろうか，彼はあとで次の家に向かう途中で考えながら歩いたが，それも彼がいくら考え込んでみたところでわかるはずもないことなので，おそらく何かの目的があって採っておいたものなのだろうということで一応納得することにした。

「たとえば，あなたが『葉っぱ』と聞いて思いつくのって，ふつうはこの朴の葉みたいなものよね。だけど，銀杏や楓みたいな形もある。それらと比べてみて初めて，朴の木は朴の木としてこんな葉をつける特徴の木なんだとわかる・・・ってことなのよ。森にいたほうがわかることのほうが私には大きい。もっとも，時々には街に出たり，高台からこの森

を見渡すこともあるけどね。北のほうはもう紅葉してるかとか。」

「ふーん……。わかるようなわかんないような。」

「別に理屈はわからなくていいのよ。感覚で。でも、私がここにいるのはそういうわけ。それはわかってもらえらると思うけど？」

「うん、なんとなくだけど。」

「それならよろしい！ふふふ。それとね、森の中から見ると星空の方が好きなの。特に北斗七星がね。」

第六章 木こり 2006/11/12

弁当を食べる場所は湖のほとりの草地に決めてあった。この森が「白い森」と呼ばれているのは、森の北部に生えている木の大半が白樺であることと、彼が毎日弁当を食べるこの湖が時折白い霧に覆われるからである。

食べ終えて本来の配達順路に戻った時、ちょうど木こりのペーチャと出会った。

「よお。」

気さくに話しかけてくるペーチャは彼と同世代のはずなのに日に焼けて実年齢より老けて見える。アリオージャは荷物を探った。

「今日もお袋さんから手紙が来てるぞ。」

「そうか。ありがとう。」

ペーチャは少し照れそうになる自分をごまかしながら受け取った。とりたてて照れを隠す必要もないのだが、彼はそういう男だ。母親は少し遠い町に、彼の兄夫婦と暮らしている。

「たまにはお袋さんに便りを出してやれよ、」

「ああ……。そうだ、これ持ってけ。」

ペーチャは白樺の枝の一束をアリオージャのほうへ押しやった。

「白樺じゃないか。それがどうかしたか。」

「これをな、薪にするんだよ。いい香りがするんだぜ。まだ知らないだろう？」

「ほほお、そんなら有り難く。」

「そうともさ。」

それから二人はしばらく連れ立って歩いた。配達順路で次に回るのがペーチャの木こり小屋だったからである。

「ああ、そういえば……。今朝がた小さな女の子を見かけたんだが、ありゃどこの子だい？」

ペーチャが思い出したように尋ねた。

「女の子？はて、このへんには子供がいるような家はないが。」

「なんだ、お前に訊けばわかるだろうと思ったんだが、知らないのか。」

「はてなあ……。新しい家族が引っ越してきたんなら、局から連絡が来るはずだからな

あ。」
彼は首をかしげた。
「もしかしたらピクニックにでも来たんじゃないのか。」
「いや、夏ならわかるが、もう十一月 だぜ。」
「うーん・・・。」
「もし迷子だったら大変だから追いかけたんだが、あいにく見失ってしまった。気になってな。」
気がつく二人は木こり小屋の前まで来ていた。
「俺のほうでも気をつけておこう。局にも問い合わせしておくよ。それじゃな。」

第七章 うつろい 2006/11/14

その日はいつもより森を出る時刻が遅くなった。冬至を一ヵ月後に控えて、日の入りも早くなっている。日の光はもはや西の地平線近くに赤く残るだけであった。
「あれ？」
アリョーシャは道の遠くの方にちらと小さな人影を見た。遠くから、しかも黄昏時の微かな光の中なのでよくは見えないが、白いフードマントを着た子供のようにだった。ひょっとしたらあれがさっきペーチャが見たと言っていた子だろうか、と思いながら走りかけたが、そのときにはもうその影は消えていた。
「そりゃ、たぶん森の妖精さまさね。」
家に帰ってその話をすると、同居している母親のソフィアはそう言った。
「妖精さまあ？」
「そうだよ。たしか、お前にもよくこの話はしてやったはずだがね。今も私らは妖精さまにずいぶん助けていただいているんだ。だいたい、森や町々に季節が順番どおりに巡ってくるのも、みんな妖精さまたちがきちんと着替えをしてくださるからさ。もしかしたら、妖精さまが冬のコートを取りに行き来されたのかもしれないねえ。」
「うーん、そういえばそんな話も聞いたっけなあ。でも俺、妖精って年寄りだと想ってた。長いこと生きてるんだろ？」
「妖精さまはね、歳とらないんだよ。ほんとにこの子はしょうがないねえ。」
「ちえっ。」
母親にとっては、子供は成長しても子供のままなのだ。それは彼にもよくわかっている。だからとりたてて怒らない。それに、言われてみれば妖精たちの衣替えの話は、今も彼の心のどこかに確かに息づいている。
自分はいつの間に子供の頃に聞いていた多くの話を忘れていたのだろう、と彼は思った。空飛ぶじゅうたんや、魔法使いや、お菓子の家や・・・。そうだ、水を汲んでも汲んでも減らない柄杓の話もあったっけ。たしかそれが北斗七星になって・・・俺はあの話がいちばん好きだった。

二階の寝室の窓からは今夜も北斗七星が澄んだ空に輝いているのが見える。物心ついてからずっと見続けてきた星だが、彼にはそれが今日はやけに大きく感じた。

付記 2006/11/14

いくつか浮かんできたモチーフが、どうしても一つの舞台に乗らない、ということが時々あります。今回がまさにそれで、その仲介役を北斗七星にやってもらいました。

北斗七星は、私にとっても大きな存在でありまして、特にある野外コンサートのときに見上げた北斗七星の大きさは、生涯消えることはないであろう、と思っています。そんなことも含めてテーマに。

海洋編

同時多発テロ以降、イスラム教がどうも誤解されているようなので、その点を書けないだろうかというのが趣旨です。今テロを起こしている人たちは、敬虔なイスラム教徒ではありません。単に民族対立に信仰心を利用していただけ、もしくは悪い奴らに騙されているに過ぎないのです。そうでなければ、断食月に戦闘を仕掛けたり、モスクを攻撃したり、ましてや同胞を傷つけるような行為は決してしません（そのはずです）。

そもそも西欧諸国が手を出したことで、中東の伝統的な社会形態が乱れ始めたような気がしますので、時代設定はそれ以前でなければなりません。で、当時の日本人が学べるものとなるとオランダ語しかないわけです。私自身はオランダ語を知らないけれど、地理的にドイツ語と似ているだろうという前提でした。なおかつ、当時の日本人を如何にしてイスラム社会に送り込むか、海路しかないだろう・・・こうして出来たのが玄庵です。

出身を相馬藩にしたのは、ご当地が馬追いで有名であることも理由の一つであります。が、実は私の父方の祖先が相馬藩の家臣だったらしいのです。まんざら無縁ではないということで多少の親近感が・・・。

森林編

若い時に覚えたものはよく出てきますねえ。ロシア語の名前はたくさん思いつきますし、特に小学校四年のときの国語の教科書には、かなり影響を受けてると思います。そのなかにあったのが立原えりか著「古いしらかばの木」で、このお話の最後に"白樺の枝は燃やすといい香りがする"という記述が出てくるんです。実はこれがずっと夢なんですね。やってみたい・・・。

また、七章でアリョーシャが思い出す"水を汲んでも汲んでも減らない柄杓の話"もどこかに実在する童話です。こちらは本当に小さいときに読んだので創作か伝承かも不明なんです。

教会の老夫婦にも、モデルがいます。ある歌の登場人物で、歌の中ではその人は亡くなったことになっているのですが、もし生きて安らかな老いを迎えられたら恐らくこんなふうだったかなあと。それらが題材です。

最後に、ここまで読んで下さった方々に心より感謝いたします。どうもありがとうございました。

作品の著作権について：

本作品は、津田理恵子（ハンドルネーム：三毛猫モカ）が「まるまど文学館」サイトにおいて発表したものです。転載・紹介等につきましては、事前に作者当人宛てにメールをいただきたく、何卒よろしくお願い致します。

連絡先： cosmos_biwa@yahoo.co.jp